

## 研究資料

## 感性型人間の図柄に対する感情評価—男性の場合—

## Evaluation of Feelings of the Hyper-Sensitive toward Patterns~In the Cases of Men~

中谷 眞三代 Masayo Nakatani The University of Shiga Prefecture  
 鈴木 伸子 Nobuko Suzuki The University of Shiga Prefecture

## Abstract

There were more specific characteristics in the feeling evaluation of basic patterns in the hyper-sensitive women than the lower-sensitive. The present study was made with men as the subjects and statistic analysis of the results were conducted by means of factor analysis, quantification theory and analysis of variance. The following characteristics were found in the evaluation by the hyper-sensitive men (H-group) when compared to those of the lower-sensitive men (L-group).

- 1) The numbers of the extracted factor were 3 for H-group and 2 for L-group, showing significant differences in the factor structure between H and L groups.
- 2) H-group evaluated the striped and checked patterns to be friendly and the pattern of flowers to be not friendly.
- 3) The linear patterns were felt friendly and the curve patterns were not.
- 4) The positive patterns were felt charming and the negative one were not.
- 5) H-group had a greater tendency to evaluate clothes for colors than for patterns.
- 6) While the lower-sensitive group and higher load of friendly image items, the hyper-sensitive group had higher load of charming and elegant image items.
- 7) The evaluation of H-group varied more widely.

## 要 旨

女性高感度群は、低感度群に比して基本的図柄に対する感情評価に特徴的結果を示した。そこで、今回は男性を対象に同様の実験を行った。さらに因子分析、数量化分析及び分散分析を行ったところ高感度群は低感度群に比して次のような特徴的結果が得られた。

- 1) 低感度群の2因子に対して3因子が抽出され、因子構造に若干違いがみられた。
- 2) 縞・格子柄を親しみやすく花柄を親しみがないと評価していた。
- 3) 直線柄は親しみがあり、曲線柄は親しみがないと評価していた。
- 4) ポジは魅力がなくネガは魅力があると評価していた。
- 5) 色で評価する傾向が認められた。
- 6) 低感度群の評価が親しみのイメージ項目の負荷が高いのに対して、高感度群の評価は魅力、優雅のイメージの負荷が高かった。
- 7) 評価にバラツキが多かった。

1. はじめに

情細的評価項目には評価に個人差が多く、その個人差は感性によるところが大きく、反対に理性や知性では測りしれない不明確な部分と考えられている。この感性の高い人は新しいものや流行への興味・関心が強く、また、それらを取り入れることも積極的であると言われている<sup>1)</sup>。被服は直感や感情に訴えて美的感情を誘起するものであり、色・図柄などが互いに共存して、感情効果に影響を与えている。図柄に対しておもに、機能的評価項目を用いた縞柄<sup>2~5)</sup>や水玉柄<sup>6~9)</sup>とイメージの関わりについての報告はあるが、情緒的評価項目を用いた報告はない。

前報<sup>10)</sup>において女性を対象に情緒的項目を用い、被服によく使用される基本的図柄に対する評価を行った結果、高感性人間のもつ特徴が明らかになった。その特異性に関して性別による差があるかどうかを究明するため今回は男性を対象に同様の実験を試みた結果、若干の知見を得たので報告する。

2. 方法

2.1. 図柄試料 前報<sup>10)</sup>と同様

2.2. 実験方法

被験者は色覚正常な18歳から30歳の男性115名である。他は前報<sup>10)</sup>に同じ。

2.3. 被験者の抽出およびデータ処理法

115名による一対比較法の判定の一貫性を検討するため前報<sup>10)</sup>と同様に一意性の検定<sup>11)</sup>を行い、被験者1人ずつの識別能力を見て、首尾一貫している64名(0 < d < 13)を抽出した。

さらに、この64名を対象に高感性尺度調査<sup>1)</sup>を行い高・中・低感性群に分類したところ、それぞれ34.4, 29.7, 35.9%となり、以後これらの被験者による分析(尺度値の算出, 因子分析, 数量化分析I類, 分散分析)を行った。

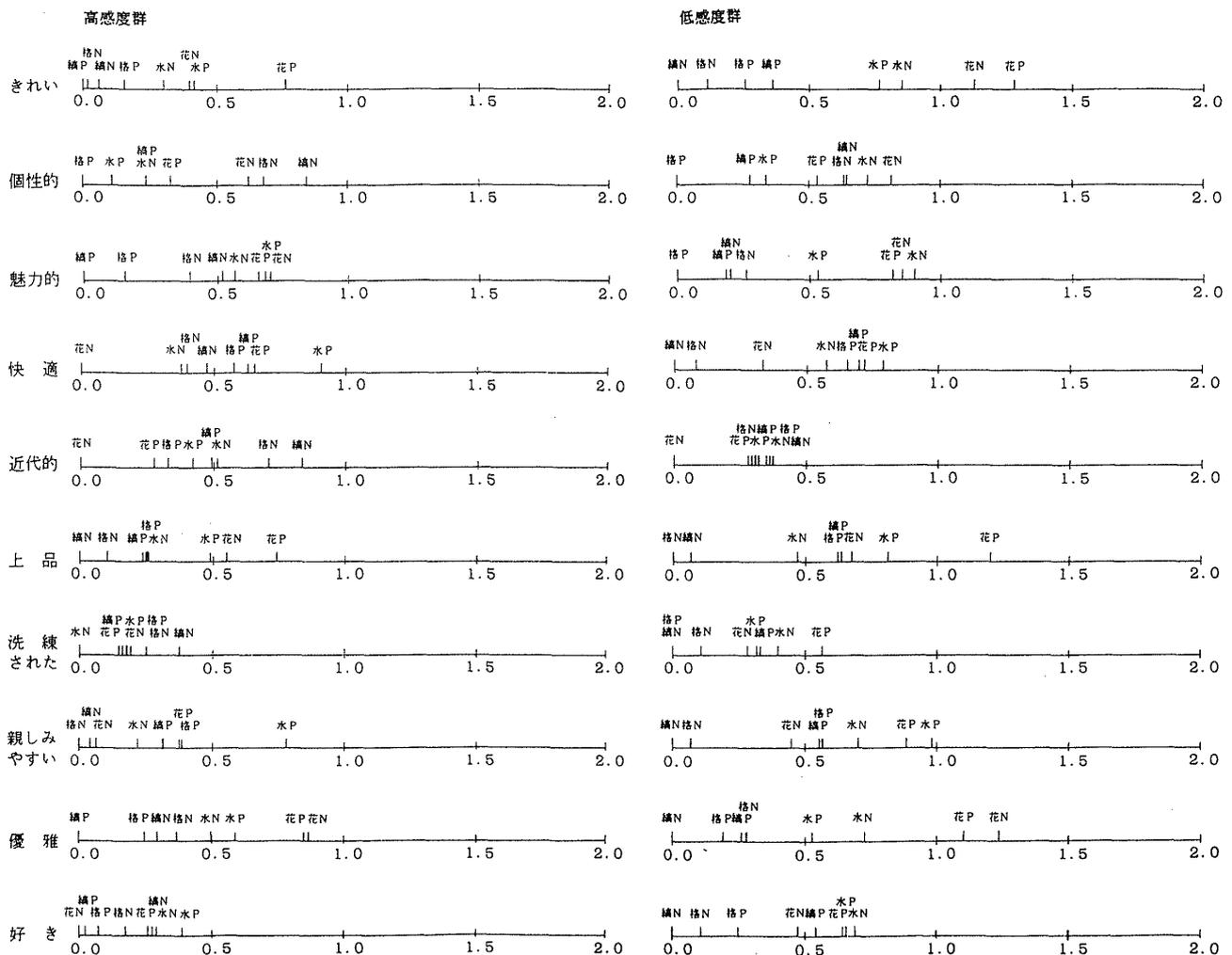


図1 図柄 (ポジ・ネガ別) の尺度値

### 3. 実験結果および考察

#### 3.1. 一対比較法

高感度群と低感度群の各図柄（ポジ・ネガ別）の尺度値を項目別に求めたものが図1である。

高、低感度群で同じ傾向の評価をしていたのは次のとおりである。

花柄ポジ・ネガ、格子柄ポジ・ネガが高低間で同じ傾向の項目が多い。花柄ポジ・ネガが上位3位まで、格子柄ポジ・ネガが下位3位までの項目が多く、それらは〈魅力的〉〈優雅〉〈好き〉〈きれい〉〈個性的〉であった。逆に花柄ネガが下位であった項目は〈快適〉〈近代的〉〈親しみやすい〉〈好き〉であった。〈近代的〉では最下位であった。

また、水玉柄ポジが上位3位までの項目は〈きれい〉〈魅力的〉〈快適〉〈上品〉〈親しみやすい〉〈優雅〉〈好き〉でしかも〈快適〉〈親しみやすい〉は第1位に評価していた。

また、高、低感度群間で異なった評価をしていたのは次のとおりである。縞柄ネガを最下位に評価しているのは低感度群に多く、〈きれい〉〈快適〉〈洗練された〉〈親しみやすい〉〈優雅〉〈好き〉で高感度群では〈上品〉のみであった。

また、花柄ネガを最下位に評価していたのは高感度群に多く〈快適〉〈近代的〉〈好き〉で低感度群では〈近代的〉のみであった。水玉柄ポジを上位3位までに評価していた項目は高感度群に多く〈きれい〉〈魅力的〉〈快適〉〈上品〉〈親しみやすい〉〈優雅〉〈好き〉でしかも〈快適〉〈親しみやすい〉〈好き〉は最上位であった。これに対し、低感度群では〈快適〉〈上品〉〈親しみやすい〉〈好き〉であった。

水玉柄ネガについては、ポジと反対で上位3位までに評価していたのは低感度群に多く〈快適〉〈上品〉を除く8項目であったのに対し高感度群においては〈近代的〉〈好き〉の2項目であった。

評価のバラツキは高感度群に多く〈洗練された〉〈親しみやすい〉〈好き〉で低感度群は〈近代的〉であった。

すなわち、高、低感度群間で評価に違いがみられたのは縞柄ネガと水玉柄ポジであった。

つぎに4種の図柄別尺度値を項目別にみれば、高、低感度群間で同じ評価をしていたのは次のとおりである。

花柄が上位、格子柄が下位の項目が多く〈魅力的〉〈近代的〉〈親しみやすい〉〈優雅〉であった。その他

〈きれい〉〈上品〉も縞・格子柄間の評価に差がなく、高、低ほぼ同じ評価をしていると考えられた。

縞柄を上位に評価しているのは〈近代的〉であった。同様に水玉柄を上位に評価しているのは〈快適〉〈親しみやすい〉〈好き〉であった。格子柄を最上位に評価したのは両群とも皆無で、第2位が〈近代的〉の項目であった。花柄、水玉柄が上位で縞・格子柄を下位に評価している項目が多く〈きれい〉〈魅力的〉〈上品〉〈親しみやすい〉〈優雅〉であった。なお、〈個性的〉〈快適〉〈洗練された〉は両群で比較的评价にバラツキがみられたのに対し、〈きれい〉〈優雅〉は被験者の見方に共通性がみられた。

ついで、高、低感度群間で異なった評価をしていたのは次のとおりである。

縞柄に対して〈個性的〉〈洗練された〉の項目では、高感度群は第1位に評価していたのに対し低感度群は低い評価であった。とくに〈洗練された〉の項目は、高、低感度群間で逆の評価をしており、高感度群は縞・格子柄が上位、水玉・花柄が下位で、反対に低感度群は花・水玉柄を上位に、縞・格子柄を下位に評価する項目が多かった。また、低感度群は高感度群より花柄を高く評価している項目が多かった。ちなみに、この低感度群の傾向は、前報<sup>10)</sup>における女性の評価と同調していた。高感度群は縞柄、低感度群は花柄を〈個性的〉とみていた。

さらに、低感度群は全ての項目に対して花柄と水玉柄（曲線柄）、縞柄と格子柄（直線柄）を対で評価する傾向がみられた。なお、評価にバラツキが多いのは高感度群であり、それらは〈洗練された〉〈親しみやすい〉〈好き〉で、低感度群は〈近代的〉の項目であった。低感度群は〈近代的〉を除いて他の全ての項目において曲線柄を上位に、直線柄を下位に評価しており、つまりポジ・ネガ（色）より柄（形）で評価していた。また、高感度群は〈個性的〉〈快適〉〈好き〉の項目では評価が混然としていた。

さらに、直線・曲線柄（ポジ・ネガ別）の尺度値を項目別にみれば、高、低感度群で同じ評価をしていたのは次のとおりである。

〈きれい〉〈魅力的〉〈上品〉〈優雅〉の項目は高、低感度群の順位は全て同じで、曲線柄を上位に評価していた。

曲線柄ポジを最上位、直線柄ネガを最下位に評価していたのは〈きれい〉〈上品〉〈親しみやすい〉であった。曲線柄ネガを最上位に直線柄ポジを最下位に評価

していたのは〈魅力的〉〈優雅〉の項目であった。曲線柄ポジが最上位の項目が多く最下位は〈快適〉のみであった。〈きれい〉〈魅力的〉〈上品〉〈優雅〉〈洗練された〉は直線・曲線柄で評価し、〈個性的〉〈快適〉はポジ・ネガで評価していることが明らかになった。また、直線柄ネガを最上位に評価していたのは〈近代的〉のみであった。

次に、高、低感度群間で異なった評価をしていたのは以下のとおりである。

直線柄ポジに対して〈近代的〉〈親しみやすい〉の項目は高感度群が、〈好き〉は低感度群が高く評価していた。直線柄ネガに対しては〈個性的〉〈好き〉の項目は高感度群が、〈悦適〉は低感度群が高く評価していた。

曲線柄ネガに対して〈快適〉〈洗練された〉〈親しみやすい〉〈好き〉は高感度群に比して低感度群は高く評価していた。とくに〈洗練された〉については高、低感度群間で逆の評価をしており高感度群は直線柄を、低感度群は曲線柄を洗練されているとみていた。

低感度群は直線・曲線柄で評価している項目が非常に多く、曲線柄を上位、直線柄を下位に評価しているのに対し、高感度群は曲線柄を上位にしている項目が低感度群に比して少なかった。逆に低感度群に比してポジ・ネガで評価している項目がやや多かった。

なお、評価のバラツキが大であった項目は低感度群より高感度群の方がやや多く、高感度群は〈洗練された〉〈好き〉、低感度群は〈近代的〉の項目であった。

さらに、高、低感度群間でつけられた項目別図柄(ポジ・ネガ別)、直線・曲線柄(ポジ・ネガ別)及び図柄別の尺度値の順位に差があるかどうか調べるため、スピアマンの順位相関係数<sup>12)</sup>を求めた。さらに、その検定<sup>13)</sup>を行ったものが表1である。

高、低感度群間の評価に特に差が認められたのは図柄(ポジ・ネガ別)では〈洗練された〉〈好き〉〈近代的〉で、各図柄別では〈快適〉〈洗練された〉直線・曲線柄では〈好き〉であった。これらは、評価にバラツキが多かった項目や評価が混然としていた項目と同調していた。

以上により、高、低感度群とも形で評価しているが、そのなかで高感度群は低感度群に比して色で評価する傾向も若干認められた。このことは心理学の色・形分類検査法という色反応型、形反応型に関する性格について言及することは不可能であるが、感性派の人間は直感的で色型人間<sup>14)</sup>であるという説と一部同調すると

表1 順位相関係数

項目	図柄(ポジ・ネガ別)		図柄別		直線・曲線柄(ポジ・ネガ別)	
	有意差検定 5% 1%		有意差検定 5% 1%		有意差検定 5% 1%	
きれいな	0.76 *		0.8 *		1	
個性的	0.71 *		0		0.8	*
魅力的	0.81 *		1		1	
快適	0.79 *		0.2 *	*	0.8	*
近代的	0.62 *	*	1		0.8	*
上品	0.86		0.8 *	*	1	
洗練された	-0.94		-0.6 *	*	-0.8	*
親しみやすい	0.86		1		0.8	
優雅	0.86		1		1	
好き	0.40 *	*	0.8 *		0.4	*

P<0.05  
P<0.01

表2 因子分析結果(全体)

因子	評定項目	因子負荷量		共通性
		I	II	
I	優雅	0.988	-0.030	0.978
	きれいな	0.971	0.229	0.995
	魅力的	0.941	-0.221	0.934
	洗練された	0.914	0.030	0.836
	好き	0.750	0.441	0.758
	上品	0.730	0.624	0.922
	近代的	-0.561	-0.369	0.451
II	快適	0.077	0.977	0.960
	親しみやすい	0.334	0.919	0.956
	個性的	0.516	-0.843	0.977
固有値		5.801	2.965	
寄与率(%)	因子別	58.0	29.7	
	累積	58.0	87.7	

表3 因子分析結果(高、低別)

高感度群					
因子	評定項目	因子負荷量			共通性
		I	II	III	
I	魅力的	0.972	0.079	-0.109	0.962
	優雅	0.931	-0.317	-0.142	0.987
	きれいな	0.837	-0.440	0.217	0.940
II	近代的	-0.333	0.896	0.138	0.933
	洗練された	-0.134	0.679	-0.254	0.544
	上品	0.661	-0.677	0.169	0.924
III	快適	-0.103	0.144	0.944	0.923
	親しみやすい	0.129	-0.314	0.905	0.934
	個性的	0.219	0.603	-0.736	0.953
	好き	0.533	0.555	0.587	0.937
固有値		4.359	2.739	1.939	
寄与率(%)	因子別	43.6	27.4	19.4	
	累積	43.6	71.0	90.4	

低感度群				
因子	評定項目	因子負荷量		共通性
		I	II	
I	親しみやすい	0.980	0.009	0.961
	快適	0.964	-0.236	0.985
	上品	0.914	0.170	0.864
	好き	0.902	0.298	0.903
	洗練された	0.772	0.473	0.820
	きれいな	0.718	0.683	0.982
II	個性的	-0.345	0.888	0.907
	魅力的	0.443	0.851	0.920
	優雅	0.541	0.811	0.951
	近代的	-0.018	-0.783	0.614
固有値		6.231	2.675	
寄与率(%)	因子別	62.3	26.8	
	累積	62.3	89.1	

考えられた。

### 3.2. 因子分析

一対比較法により求めた得点を素点として項目別各図柄の相関係数を求め、図柄のイメージに関する主因子を見いだすため因子分析を行った。全データでの因子分析結果、表2のような2因子が抽出された。第1因子は“魅力”の因子、第2因子は“親しみ”の因子と命名した。これらの因子の寄与率、累積寄与率は表2のとおりで、男性群における図柄のイメージをほぼこれらで説明しうると考えられる。つぎに、高、低感度群別に因子分析した結果は表3のとおりである。高、低感度群間の因子構造に違いがみられ、高感度群は3次元、低感度群は2次元構造をなしていた。高感度群は全体的場合と異なり3因子が抽出され、全体的場合の第1因子が高感度群の第1、IIに分れていた。低感度群において第1因子に属していた〈きれい〉は高感度群の第1因子に、〈上品〉〈洗練された〉は第2因子に、〈快適〉〈好き〉〈親しみやすい〉は第3因子に属していた。また、低感度群において、第2因子に属していた〈魅力的〉〈優雅〉は第1因子に、〈近代的〉は第2因子に、〈個性的〉は第3因子に属していた。高感度群の第1因子において負荷量の高い項目は〈魅力的〉〈優雅〉で〈きれい〉のイメージと関連が深かった。一方、低感度群では、これらの項目は〈個性的〉〈近代的〉のイメージと関連が強かった。さらに、表

3より抽出した2因子を直交させた空間が8図柄のイメージ空間であり、本実験では図柄のイメージは2次元構造をなしているといえることができる(図2)。

高、低感度群別図柄とイメージの関連を見るため、各図柄(ポジ・ネガ別)、直線・曲線柄(ポジ・ネガ別)の因子得点およびその平均値を求め、これをイメージ空間上に布置したのが図3、4である。

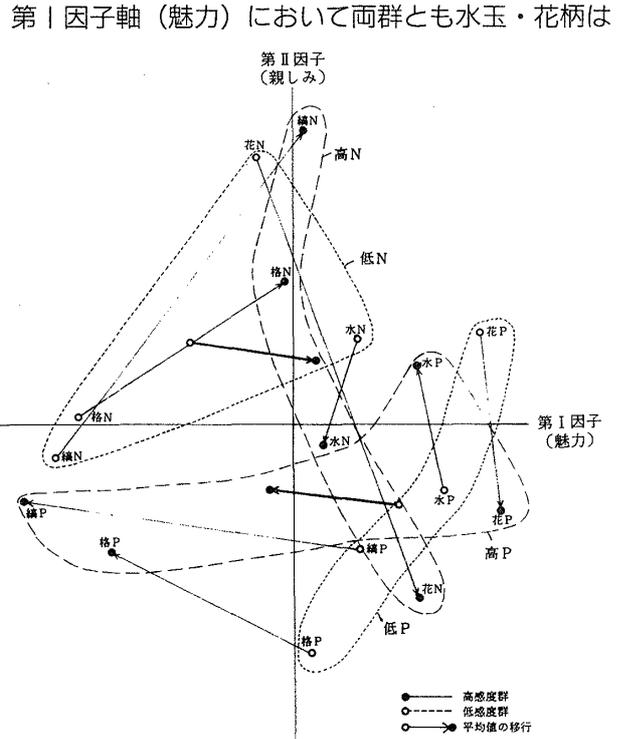


図3 図柄(ポジ・ネガ別)とイメージ

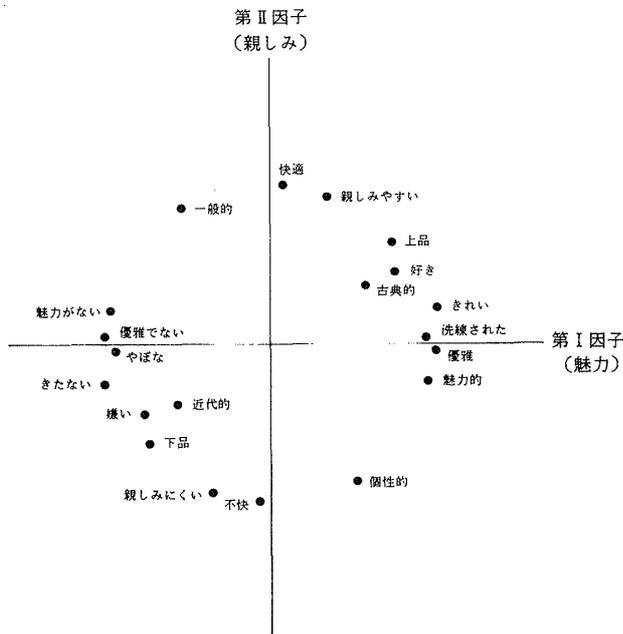


図2 各尺度の布置(第I因子軸×第II因子軸)

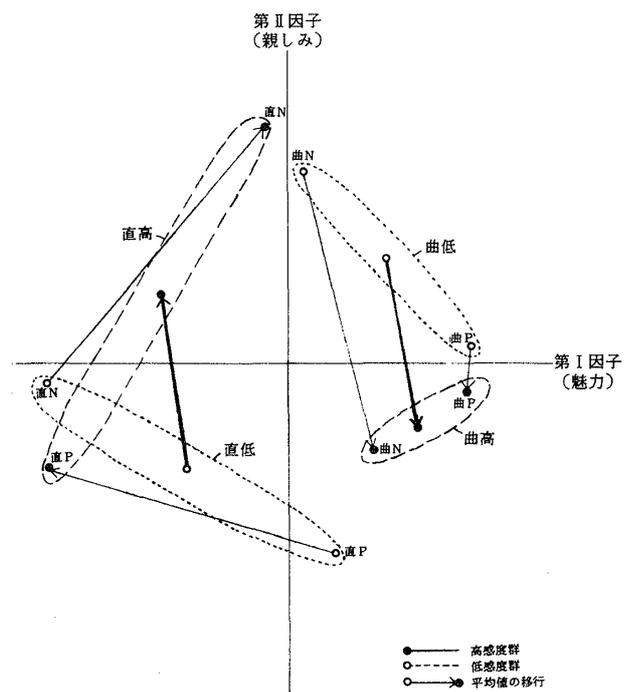


図4 直線・曲線柄(ポジ・ネガ別)とイメージ

上位、縞・格子柄を下位に評価していた。第Ⅱ因子軸（親しみ）において両群とも縞・格子柄のネガを上位、ポジを下位に評価していた。

高感度群は低感度群に比して縞・格子柄ポジを魅力がなく、ネガを魅力があると評価していた。また、高感度群は低感度群に比して縞・格子柄を親しみやすく、花柄を親しみが無い、水玉柄をやや魅力がないと評価していた。花柄ネガを高感度群は低感度群よりやや魅力はあるが親しみが無い、縞・格子柄ポジに対して高感度群は低感度群より魅力がないと評価していた。

縞・格子柄ネガに対して高感度群は低感度群より魅力的で親しみやすいと評価していた。

また、ポジ・ネガ別にみると、高感度群は低感度群に比してポジを魅力がない、反対にネガを魅力があると評価していた。

つぎに直線・曲線柄とイメージに関してみれば、両群とも曲線は魅力があるが直線は魅力がなく、曲線柄ポジを曲線柄ネガより魅力があると評価していた。高、低感度群間の評価の差が大であるのは、直線柄ポジ・ネガ、曲線柄ネガで、評価に差がないのは、曲線柄ポジであった。また、高感度群は低感度群に比して直線柄に対して親しみを感ずるが、曲線柄に対しては親しみが無いと評価していた。さらに、高感度群は低感度群に比してポジに対しては魅力がなく、ネガに対して魅力を感じると評価していた。すなわち、第Ⅰ第Ⅱ因子軸に対して両群とも直線・曲線、ポジ・ネガにおいて逆の評価をしており、また、高、低感度群間においても評価は逆であった。

〈優雅〉〈魅力的〉〈きれい〉等で構成されている第Ⅰ因子軸において曲線柄が高く、直線柄が低いのは、これらの項目について形で評価していると推測される。

また、第Ⅱ因子軸を構成している〈快適〉〈親しみやすい〉等の項目については、色で評価していると推測された。

以上により、高、低感度群とも第Ⅰ因子における項目に対しては、形で評価し、第Ⅱ因子における項目は色で評価していた。

### 3.3. 数量化分析

高感度群の図柄に対する評価要因を予測するため、高、低感度群別数量化分析を行い、各項目の重相関係数、偏相関係数を算出したのが表4である。項目別にみれば、高、低感度群とも直線・曲線柄の偏相関係数が高く、評価に強く関与していた。なかでも〈きれ

い〉〈魅力的〉〈優雅〉〈上品〉の項目については直線・曲線柄（形）の偏相関係数が高く影響が大きかった。また、〈親しみやすい〉〈個性的〉〈快適〉はポジ・ネガ（色）の影響が大きいことがわかった。

また、因子別にすれば第Ⅰ、第Ⅱ因子については高、低感度群とも直線・曲線柄が強く関与していた。高感

表4 数量化分析結果

因子	評定項目	高感度群		
		重相関係数	偏相関係数	
			直-曲	P-N
I	魅力的	0.879	*0.859	0.604
	優雅	0.862	*0.860	0.231
	きれい	0.895	*0.885	0.535
II	近代的	0.662	*0.622	0.361
	洗練された	0.656	*0.642	0.226
	上品	0.899	*0.875	0.698
III	快適	0.778	0.125	*0.776
	親しみやすい	0.885	0.617	*0.867
	個性的	0.802	0.323	*0.792
	好き	0.364	*0.364	0.030

因子	評定項目	低感度群		
		重相関係数	偏相関係数	
			直-曲	P-N
I	親しみやすい	0.964	*0.933	0.929
	快適	0.930	0.766	*0.913
	上品	0.947	0.895	*0.908
	好き	0.881	*0.857	0.646
	洗練された	0.803	*0.784	0.428
II	きれい	0.941	*0.939	0.406
	個性的	0.931	0.767	*0.915
	魅力的	0.963	*0.961	0.680
	優雅	0.873	*0.873	0.039
	近代的	0.541	*0.483	0.314

表5 分散分析結果（交互作用）

項目	高感度群			低感度群		
	ポジ-ネガ 直-曲	交互作用	検定	ポジ-ネガ 直-曲	交互作用	検定
きれい	2.12			1.89		
個性的	19.04	1.15		72.17	1.66	
	22.10			18.62		
	1.53			5.18		
魅力的	3.17	5.33	*	3.09	0.62	
	15.58			42.95		
快適	13.03	4.05	*	25.14	0.10	
	0.14			7.10		
近代的	2.20	3.67	傾向有	0.41	2.97	
	9.27			1.15		
上品	4.31	5.48	*	30.88	0.33	
	14.76			26.38		
洗練された	0.15	0.01		1.29	0.86	
	1.91			9.16		
親しみやすい	15.23	1.32		18.64	0.01	
	3.10			25.51		
優雅	0.50	0.21		0.03	1.49	
	25.12			61.76		
好き	0.01	1.77		4.56	1.87	
	0.87			17.61		
		2.95			2.10	

P<0.05

度群においてのみ抽出された第III因子においてはポジ・ネガが強く関与していた。このことから高感度群は低感度群に比してポジ・ネガの影響がやや強く、第III因子は色で評価する傾向がみられた。

### 3.4. 分散分析

高、低感度群間におけるポジ・ネガ、直線・曲線柄の交互作用をみるため、分散分析およびその検定を行ったのが表5である。ポジ・ネガ、直線・曲線柄の交互作用がみとめられた項目は高感度群の〈個性的〉〈魅力的〉〈近代的〉であった。また、〈快適〉は傾向ありであった。

高、低感度群とも〈きれい〉〈魅力的〉〈近代的〉〈洗練された〉〈優雅〉〈好き〉の評価には、直線・曲線柄の影響が強く、〈個性的〉〈快適〉はポジ・ネガの影響が強かった。

〈上品〉〈親しみやすい〉に対する影響については高感度群では〈上品〉が直線・曲線柄（形）で、〈親しみやすい〉がポジ・ネガ（色）の影響が強く、高、低感度群間で逆の結果になっていた。

全般的に高、低感度群とも直線・曲線柄の影響が強かった。

### 4. 要約

女性高感度群は低感度群に比して基本的図柄に対する感情評価に特徴的結果を示した。そこで、今回は男性を対象に同様の実験を行った。さらに因子分析、数量化分析及び分散分析を行ったところ高感度群は低感度群に比して次のような特徴的結果が得られた。

- 1) 低感度群の2因子に対して3因子が抽出され、因子構造に若干違いがみられた。
- 2) 縞・格子柄を親しみやすく花柄を親しみがないと評価していた。
- 3) 直線柄は親しみがあり、曲線柄は親しみがないと評価していた。
- 4) ポジは魅力がなくネガは魅力があると評価していた。
- 5) 色で評価する傾向が認められた。
- 6) 低感度群の評価が親しみのイメージ項目の負荷が高いのに対して、高感度群の評価は魅力、優雅のイメージの負荷が高かった。
- 7) 評価にバラツキが多かった。

なお、今回は紙面の都合により、感性型人間の男女による相違点にまで発展させることが不可能であった

ので、次回に譲り詳細に比較・検討したい。

おわりに、本研究にさいし、統計処理に関して終始ご協力いただきました宮本雅子および北村敦子姉に深く感謝いたします。

### 文献

- 1) 堀 真：高感度人間，モチベーションリサーチ研究会定例研究会報告書（1979）
- 2) 加藤雪枝，梶山藤子：被服における縞柄の配色効果，織消誌25（1984）38
- 3) 吉岡 徹：被服における図柄イメージ，家政誌36（1985）793
- 4) 小菅啓子，小林茂雄：ストライプ柄のイメージに関する基礎的考察，織消誌31（1990）42
- 5) 吉岡 徹：縞柄の2色配色におけるイメージ計量，織消誌31（1990）250
- 6) 宇野多美子：水玉模様の感情効果について，梅花短大紀要27（1978）51
- 7) 壁谷久代，加藤雪枝，梶山藤子：被服における色彩と図形の知覚に関する研究，織消誌21（1980）35
- 8) 飯塚弘子：柄の効果に関する一考察，文化女子大紀要13（1982）187
- 9) 小菅啓子，小林茂雄：水玉柄のイメージに関する基礎的考察，織消誌31（1990）35
- 10) 鈴木伸子，中谷眞三代：高感度人間の図柄に対する感情評価，日本色彩学会誌17（1993）119
- 11) 官能検査委員会：新版官能検査ハンドブック，日科技連出版社（1973）351～353
- 12) 西平重喜：統計調査法，培風館（1982）183～189
- 13) 水野哲夫：統計の基礎と実際，光生館（1986）220～221
- 14) 千々岩英彰：色型人間の研究，福村出版（1988）151～235

（受付日：1996年2月14日）

### 著者紹介



なかたに まさよ  
中谷眞三代

昭和35年3月奈良女子大学被服学科卒業

現在 滋賀県立大学助教授

日本消費者教育学会，日本繊維製品消費科学会，日本家政学会，日本衣服学会，奈良女子大学家政学

会に所属



すずきのぶこ  
鈴木伸子

昭和41年3月奈良女子大学被服学  
科卒業

現在 滋賀県立大学助教授

日本色彩学会, 色彩教育研究会,  
日本家政学会, 日本服飾学会, 日  
本衣服学会に所属